

杉村芳美著

『良い仕事』の思想

新しい仕事倫理のために』

評者：小関 隆志

1 はじめに

本書は、著者の前著『脱近代の労働觀』(ミネルヴァ書房、1990年)に次ぐ、労働觀をテーマとした最新作である。前著においては、著者は古代、中世、近代、脱近代に大きく時代区分し、それぞれの時代に支配的な労働觀を「労苦」「奉仕」「製作」「遊戯」であると総括した。著によれば、脱近代である現代は、普遍的な価値が見失われ、労働は個人の自由で気ままな「自己実現」の手段、即ち「遊戯」になってしまっているが、脱近代社会には、個人の自由気ままを超える何らかの普遍的な価値、労働倫理を見出す必要がある、と主張した。本書は、こうした立場を基本的に継承したうえで、「個人主義」に対抗する労働倫理(=「良い仕事」)を、過去の思想的潮流に一貫して見出そうとした点が特徴といえる。

2 本書の構成と内容

本書は次のような構成になっている。

第一部 ポスト勤勉社会と仕事意識

第一章 労働倫理は衰退したか

第二章 高度産業社会と労働倫理

第二部 「良い仕事」の思想

第三章 良い仕事と「善く生きること」

第四章 良い仕事と「善い行い」

第五章 良い仕事と芸術

第六章 良い仕事の概念

第三部 「新しい仕事倫理」の可能性

第七章 良い仕事と全体性

第八章 仕事におけるインテグリティ

第一部において著者は、日本においては第三次産業化の進展に伴い、かつて美德とされた勤勉の倫理は衰退しつつあり、それに代わって「労働を意味ある行為にしたいとする傾向」即ち「労働における自己実現」志向が強まったことを指摘する。著者によれば「自己実現的な労働は労働の中で『自己の絶対性』を主張する。それは労働の意味を自己の満足という観点から求める労働における快楽主義および個人主義であるが、彼は「自己実現の追求をいうものの多くは、勤勉倫理への反動として個人の楽しさやおもしろさの追求、少なくともそうした表現による自己実現の追求を強調するにとどまっている」ことから、「自己実現の労働は、倫理性を体现し得ない概念であるといわざるをえない」。これに対し、「『良い仕事』は、個人にとって望ましい仕事であるとともに、人間と社会にとって望ましい仕事でもある」という。

第二部では、「良い仕事」に関わる過去の西欧の思想の系譜をたどる。第三章では古代ギリシア、ローマの労働觀を、第四章では中世ヨーロッパの労働觀を、第五章では19~20世紀初期イギリスのウィリアム・モリスとエリック・ギルの思想を取り上げている。各時代において思想家たちが追求した望ましい労働のあり方はいずれも、「自己」という枠を超える仕事の意味付けを見出している、と著者はいう。

第三部では、第二部での労働觀の歴史的考察をもとに、「良い仕事」とは何かを検討している。第七章では、「職人仕事」の理想といふものは確かに重要ではあるが、「人とモノの

枠組みだけで考えてはならない。仕事は個人の制作行為として自己完結するようなものではない」とし、「仕事の喜びや満足感が他者や普遍と結びついている」ことを強調する。A.マッキンタイアとN.ベラーの思想を検討して、労働による「共同善」「公共善」についての思索を深め、「公共的な貢献とは社会において意味のある活動を行なうことであり、また意味があると自分が信ずる活動を行なうこと（これがコーリングの意識だろう）なのである。このように、それ自体として意味のある仕事（すなわち良い仕事）は共同社会へのコミットメントと切り離せないだろう」と述べる。第八章では、結論として「良い仕事」の諸条件を10カ条にまとめている。

3 労働觀の歴史

労働觀の歴史の叙述は清水正徳『働くことの意味』（岩波新書、1982年）と対比すると分かりやすい。清水正徳は資本主義経済が支配的となる近代以降に主眼を置き、資本主義経済における労働疎外や物化・物神性とその克服に焦点を合わせている。清水自身の労働觀は、合目的的・自己対象化的・自己実現的労働（自然に対する目的意識的な作用）と、アソシエーション的労働（人間の自由な連帯）である。

これに対し著者は、古代から現代に至る諸思想の中から、「良い仕事」の労働觀を一貫した系譜として描き出している。この点が著者の「良い仕事」労働觀の第一の特徴である。著者は、西洋古代、中世においても労働を積極的に肯定する思想が脈々と息づいていたことを論証する。著者は古代から現代に至る歴史を通観し、「仕事（労働）倫理とは、決して近代以降に特有のものでも、産業社会に固有のものでもない。望ましい仕事のあり方、仕事への望ましい態度についての信念や価値意識としては、どの社会

にも存在した」（223ページ）ことを主張する。この点で、例えば“古代ギリシア人は労働を消極的に捉えていた”という常識的な見方が覆される。

第二の特徴は、「職人仕事の理想」を引き合いに出しながら、自己実現的労働觀やアソシエーション的労働觀を絶対視せず、その先にあるものとして「良い仕事」の思想を位置付けていることである。著者は、個人を絶対視する「個人主義」を批判し、個人を超越する価値を労働において実現することの重要性を訴える。著者によれば、「自己実現」の思想は本質的に個人を超越した普遍的な価値、倫理には到達し得ないのであり、「自己実現」に欠落している価値として「共同生活や全体への貢献、善惡の問題や道徳との関わり、様々な領域への配慮と平衡、共同的あるいは普遍的な価値への結びつきなどの要素」（212ページ）があるという。

4 いくつかの現実的課題

このように著者は、過去の思想をたどりながら、「良い仕事」という、個人の自己満足のレベルを超えた労働倫理が存在することの必要性を訴えている。価値やイデオロギーが相対化し、生の意味や労働の意味を見出し難い現代にあって、著者が労働の倫理を真正面から取り上げたことの意義はまことに大きい。評者なりに、著者の問題提起からいくつかの現実的課題、論点を引き出してみたい。

第一は、個人を超越した「共同善」「普遍的な価値」とは、一体何を意味するのかということである。単なる自己満足のための労働に終始するのではなく、労働者が自らの労働の成果が社会に貢献することをめざす、ということであるが、現実の社会は様々な対立的契機、矛盾、差異に満ちており、その中で何が「普遍」なのか、「共同善」は果たして存在しうるのかとい

う問題が生じる。著者は前著において「奉仕」と「隸属」の関係について語っている（前著第8章4節）が、下手をすれば「奉仕」が権力や資本への「隸属」になる恐れもある。無論、この点は本書でも随所で指摘されている。また、個人を超越した存在が常に「善」を体現しているとも限らない。「奉仕」や「良い仕事」であることの根拠を具体的に掘り下げて考えていく必要がある。

第二は、個人がなぜ、いかにして労働倫理を志向するのか、ということである。著者は個人の欲求と労働倫理とを対立させて論じているが、倫理があくまでも個人の欲求から切り離されたところ（過去の伝統など）に存するとすれば、宗教者であればともかく、高いところから「…せねばならない」「…すべきである」などと呼びかけるだけでは、説得力に欠けるのではないか。著者も、「仕事の喜びや満足感が他者や普遍と結びついている」（186ページ）ことについて言及してはいるが、残念ながら個人に外在的な「倫理」と個人の欲求との関係についての議論が充分に展開されているようには見受けられない。宗教的動機に拘らないのであれば、人間は本来的に他者・社会への貢献によって自らの存在意義を確認しようとする存在であるという、人間存在の実態に基づいた観点からも考える必要がある。

第三には、客觀的情勢である。時代を超えて普遍的な「良い仕事」の思想が存在してきたことを認めつつも、他方でそれぞれの時代状況、社会的・宗教的・文化的背景によって異なる側面も否定できない。清水が叙述の中軸に据えていた労働疎外・物化・物神性の克服という課題は、資本主義経済に特有のものと言える。資本主義経済社会の下で「良い仕事」を実現しようとすれば、様々な困難にぶつかるであろう。著者は「われわれの実際の仕事が良い仕事である

ことはめったにないし、良い仕事であることがいかに困難であるかを思い知らされる。われわれの仕事は實際には、金銭を手に入れるためだけのものであったり、社会的な貢献とは無関係であったり、楽しさを微塵も感じさせなかったり、自分の能力が充分生かされていなかったりすることがほとんどであろう。……しかし、このことは良い仕事が決して不可能であることを意味しない。そして、實際の仕事が良い仕事と無縁であることも意味しない。むしろ、良い仕事は現在の仕事とどこか別のところにあるのではなく、現在の仕事そのものの中にあるとさえ言えるかもしれない」（210ページ）と述べている。

5 「良い仕事」と労働運動

客觀的情勢の中で「良い仕事」の実現可能性を探ろうとすれば、著者も指摘するように、単に個人の態度や心がけに還元してしまうのではなく、実態の分析や労働者の実践・運動に着目することによって、「良い仕事」実現の方途を展望していくことも一方では必要であるように思われる。

著者が世話を務める「OWL（オリジナル・ワーキング・ライフ）仕事研究会」の活動は、本書あとがきに紹介されているが、この会には労働者が多数参加していることから、抽象的・観念的になりがちな労働倫理の問題を現実の具体的な事例に即して検証し、生きた倫理として鍛える場になり得ると思われる。

労働倫理の問題を扱う本書には、労働運動に関する論述は見られない。しかし評者の関心からすれば、「共同善」「公共善」という文脈での「良い仕事」の思想に、労働運動の視点を取り入れるとともに、労働運動にも「良い仕事」の思想を取り入れることが重要ではないかと考えられる。

「良い仕事」や「労働の社会的意義」と言つただけではやはり漠然とした感を拭えない。各産業・職場の置かれた諸条件に応じて、労働内容の改善や地域住民・消費者との協同・連帯などをどう実現していくのかを労働者が集団的に検討することによって、「良い仕事」が具体的な行動指針になり得るのではなかろうか。

他方、労働運動に、労働の社会的意義の視点を確立することが重要であるという指摘が、労働組合の産業政策闘争に関する議論などに見られる（例えば鎌倉孝夫「労働組合の主体形成と政策闘争」鎌倉孝夫・福田豊編『参加・創造・社会改革 労働組合の制度・政策闘争』ありえす書房、1985年。下山房雄「労働組合の産業政策闘争の意義 交通労働組合の交通政策闘争のために』『賃金と社会保障』1965号、1991年9月上旬号など）。日本労働者協同組合連合会でも7点の「よい仕事」原則を作っている

（内山哲郎「集団的自己雇用と集団的生活援助」富沢賢治他編著『労働者協同組合の新地平 社会的経済の現代的再生』日本経済評論社、1996年）

上記の諸課題は専ら評者の関心によるものであるが、著者の描き出した「良い仕事」の思想系譜は、労働の社会的意義をめざす現代の労働組合運動を考察する上でも、労働倫理の必要性について思想史の見地から鋭い問題提起を行つており、大変示唆に富んでいるように思われる。

（杉村芳美著『「良い仕事」の思想 新しい仕事倫理のために』（中公新書）中央公論社、1997年10月、235ページ、定価700円+税）
（こせき・たかし 一橋大学大学院博士課程、法政大學大原社会問題研究所兼任研究員）